

# 古文書倶楽部

【発行】

秋田県公文書館

2012.3

第46号

当館の閲覧室を春から大きく模様替えします。館蔵絵図資料をデジタルデータ化した画像を自由に検索できる絵図検索データベースを配置します。どうぞご利用ください。

## 『北家御日記』 活字で読めます

このたび、秋田県の指定文化財である『北家御日記』七六五巻の複製本と、翻刻原稿を活字に打ち直した翻刻本が、閲覧室で自由に見られるようになりました。『北家御日記』は角館の所ところ預あずかりであった佐竹北家の日記です。二二〇年にわたる歴史を活字でお楽しみいただけます。

今回は、『北家御日記』からエピソードのほんの一例をご紹介します。

（2012年3月）  
元禄二年（一六八九）七月二十日の夜、椿村（旧中仙町）の百姓徳左衛門宅へ盗賊が入りました。家財を取り上げ火を付けて家を焼くという凶行でした。さらに蔵を破ろうとしたとき、徳左衛門宅の下人が槍を突いて抵抗したため、蔵へは火を付けず退散し、怪我人もありませんでした。

部 佐竹北家では、組下の佐藤惣右衛門と青柳郷  
楽 右衛門をすぐに椿村に派遣して捜査させます。  
書 柏木田村（旧中仙町）の庄五郎という者が盗品  
文 を所持しているという情報があり、調べてみる  
と 徳左衛門の小鍋を持っていました。そこで庄



「北家御日記」複製本・翻刻本(閲覧室)

人は長五郎と  
いい仲間  
を十五人  
六人白  
状しま  
した。  
しかも  
椿村の  
徳左衛  
門宅に  
盗賊に

五郎が国見村（旧太田町）の仁兵衛の所に潜伏していたところを、仁兵衛ともども召し捕り、八月十六日に庄五郎と仁兵衛は、石井六郎兵衛によって籠舎にて久保田へ護送されました。その後の久保田での詮議によって仁兵衛は宿を貸しただけなので罪が免じられました。

ところが、久保田へ護送が行われた八月十六日の夜、今度は堀田村（旧仙北町）の惣四郎という百姓の所へ夜討が入り、惣四郎は抵抗して数力所傷を負って結局打ち殺されました。火を付けられ、下人一人が消しましたが蔵が焼けました。

この事件には河原田新右衛門と岩橋又右衛門が検使として派遣されます。この検使二人は六郷で怪しい者を二人召し捕らえ、そのうちの一人は長五郎と

入った一味であることもわかりました。椿村の件は仁兵衛という者（国見村の仁兵衛とは別人）が頭かぶで十一人で行ったということでした。頭の仁兵衛は葛川村（旧中仙町）の肝煎の子供であったのが不屈者として追放になった者で、堀田村には十六人で行ったということでした。大方は矢島領へ逃げましたが、浅舞村や吉田村（ともに旧平鹿町）に四人居るといいう情報がはいります。

同地は戸村十太夫の支配地であるため、まず目明かしを派遣して、犯人が居ることを確認し、さらに所預の戸村十太夫に知らせた上で、八月二十二日に河原田・岩橋両名が浅舞から吉田まで探索し五人を召し捕っています。この五人は河原田によって久保田へ連行されました。五人のうち夜討をしたのは二人で、そのほかは夜討ちには無関係でしたが、過去に盗みを働いていたことがわかりました。

こうして、大人数で押し込み強盗を働いた上にさらに家に火を付けるという凶悪な事件は一月ほどで落着きました。

以上が『北家御日記』第三七巻の最初のほんの一六丁ほどに出てくる出来事です。ここには生類憐れみの令が江戸から角館に伝えられた記事などもあります（七月二十七日条）。

『北家御日記』には、他にも「国鱒」に関する記事や、秋田蘭画の「小田野直武」に関する記載など、角館の出来事ばかりでなく、江戸時代の様々な出来事が満載されています。

翻刻本でも複製本でも閲覧室でお気軽に手にとってご利用ください。

【佐藤 隆】

古文書こぼればなし

## 杉峠の名木「七色木」

『宇都宮孟綱旅中日記』より

今年度の講座第四回古文書解読コースでは、秋田藩家老・宇都宮孟綱が、安政二年（一八五五）に一年間、江戸詰をした際の『宇都宮孟綱旅中日記』（AS292-1）を取り上げました。その中から、杉峠の名木「七色木（しちしよぎ）」についてご紹介します。

秋田藩では羽州街道の整備を進め、元和元年（一六八二）の『領中大小道程』（県A-105）によれば、新庄領金山村の一里塚に継ぐ一里塚を雄勝郡上院内村沓懸に設けて、領内一里塚の基点としています。この間の峠が新庄領から秋田領への最初の峠で、左右に大杉が立っていたことから御境杉峠（雄勝峠・院内峠）と呼ばれていました。ここから及位側に下り半里のホウキ沢に七色木が立ち、旅人が旅の安全を祈願するとともに、道標として旅人の旅愁を慰める名木として知られていました。

46号 五日目、八月二十三日に院内を出発した孟綱一行は、杉峠を通り新庄領及位村に向かいます。第「七色木にて房吉はしめ初登之者いつれも例之通祝候」とあって、七色木に立ち寄り旅の安全を願い祝い事をする記述があります。七色木は掲載図絵のような珍しい樹木であったようで、古文書の解説文には「杉峠越て南へ禁半り、ホウキ沢七色木、一株ニ七色木生ル、名木ニシテわか

らず。家二軒有、淋しき所」（『出羽の道わけ』混架7-355-6）と記されています。

また、九代藩主義和も七色木について、「この峠のつづら下りして行道のかたへに古木有り。もとは榎やうのものへ、あたりの木の実の舎り生ひて、いろいろの木のみどりにしげりたり。俗に七色木となんいへる。むかしより、江戸へ初めてのぼる旅人の祝に、此樹を三べん巡らしてうちはやし笑うこと、たれはじめしとなく、今にそのためし有りて、けふも若き初登のものをめぐらしてぞわらふめり。」と文化三年（一八〇六）に江戸に登る際に記した『あづまの記』（『佐竹義和公頌徳集』）に触れています。



七色木（『出羽の道わけ』混架7-355-6）

これらのことから、七色木は江戸へ初めて登る者が木の周りを、はやしたてて笑いながら三度回る風習があったことを知ることができま

登之者いつれも例之通祝候」のように初めて江戸へ登る際の風習であり、その様子は「真裸で御幣を持ち三度回り神酒を供え祝った」（『新庄古老覚書』）とも伝えられています。この風習は出立ちという風習に類似しています。旅立ちはそのまま死の別れにつながるが多かった時代に、水盃を酌み交わし村境まで旅立つ人を見送り、無事に旅を終えて再び村境に帰ってくることを祈願する風習です。初めて江戸へ向かう若い藩士たちにとっては、よほどの決意をもった旅立ちだったことでしょう。

七色木の樹種については、『出羽の道わけ』は「名木ニシテわからず」、義和は「もとは榎やうのもの」としています。また『道中行程記』（A292-29）と『分間里程表』（岡384）には、七色木の左右にイタヤ（カエデ）が記載されています。エノキ（榎）は一里塚に植栽されている事例が多いのですが、秋田藩内にはサイカチ（槐）やケヤキ（樺・槐）が多くみられます（『羽州街道の変遷』）。本県の七色木として有名な樹木は、田沢湖畔・御座石神社の樹木です。樹種はマツ・スギ・サクラ・エンジュ・ナシ・エゴノキ・ハンノキとされています。

ホウキ沢はJR及位駅東寄りに位置し、現国道十三号線からは離れています。七色木が現存するかどうかは未だ確認していませんが、未知なる將軍のお膝元、江戸へ向かう若き秋田藩士たちは、約十五日の長旅の無事を祈願し、再び七色木を仰ぎ見ること念じて江戸を目指して秋田領を離れていったに違いありません。

【菊地利雄】